

「唐丹希望基金」EEC 通信 142 号 2025-2

－唐丹小中学生に届ける鎮魂と平和の思い－

## ～鎮魂と平和への願いを込めて～ ハソウ・タペストリー贈呈式

2月13日(木)昼休み、ハソウ・タペストリー贈呈式を行いました。ハソウはNHKラジオ深夜便の“坂口憲一郎”様とのご縁から、唐丹希望基金様より2018年から毎年贈呈されています。初めは生徒一人一人に送られていましたが、ハソウの窯元の都合で2021年より大きめのサイズのを学校に一ついただいております、ハソウの底には校長のメッセージを込めた言葉が刻まれています。

2021年は「感謝」、2022年は「つなぐ」、2023は空けて今年は「生きる」です。また、併せて金沢市の友禅作家“浅野富治男”様 制作タペストリーも寄贈していただいております。

贈呈式では、校長講話としてハソウとタペストリーが本校に贈られた経緯とハソウの歴史や込められた願いを紹介するとともに、「生きる」について話しました。どの生徒も真剣なまなざしで聞き、命の大切さや生きることについて考えてくれていたと思います。

【ハソウはすごく形がきれいで、タペストリーは色合いがとても素敵だと思いました。唐丹中学校に贈られてきた意味、「生きる」という言葉には様々な意味があると思うので、考えて過ごして行きたいと思いました。(3年)】

【ハソウがどのような経緯で唐丹中学校に寄贈されるようになったか、どのような思いが込められているかを知ることができました。「生きる」には東日本大震災を経験して生きることの大切さを伝えたいという意味が込められていることを知ったので、辛いことがあっても生きることが大切だと思いました。(2年)】

唐丹希望基金の皆様、浅野様、本当にありがとうございました。唐丹中生は、唐丹希望基金様をはじめとして本校を支えてくださったすべての皆様に感謝し、震災で得た教訓をつなぎ、一生懸命に生きていきます。



## 『 生きる ー東日本大震災を経て、今思うことー 』

釜石市立唐丹中学校 校長 金野 学

東日本大震災が発災した当日と翌日、それから約半年間の私の行動と周囲の状況を紹介いたします。これを読んで、少しでも感じてくれるものがあればうれしいです。

東日本大震災が発生した2011年3月11日午後2時46分、私は大船渡市の越喜来中学校で勤務していました。翌日に控えた卒業式の準備と掃除を終え、3年生と一緒に体育館脇の外水道で雑巾を洗っていた時、突然大きな地鳴りとともに自分の体を含めあたり一面がも



のすごく大きく揺れました。頭上から割れた窓ガラスが降ってきて、体育館の中は天井の鉄骨や昇降式バスケットゴールが崩れ落ちてきました。校舎の方からは生徒たちの悲鳴が聞こえてきました。私は、外で地面の上にあったのですぐその場から離れることができたのですが、あまりにも揺れが大きくしかも時間が長いため、校舎内にいた生徒や先生方は無事避難できただろうかと心配になりました。校庭に出てみると、揺れが収まる前に非難を始め、揺れが収まったころには全員が校庭に無事に避難することができていました。ほっとして、振り返ってみると、校舎のいたるところに亀裂が入り、校庭にも地割れができていました。

ほっとしたのもつかの間、津波警報が鳴り響きました。越喜来中学校は浸水想定区域からは外れていたのですが、念のためさらに高台にある畑に移動しました。移動が終わって生徒の無事を確認した後、寒さをしのぐための毛布やバスタオル類を取りに学校に戻りました。そしてそれらを生徒に届けた後、今後の学習にと津波の様子を見に先輩の先生と2人で再び学校に戻りました。

校庭の端から海の方を見ると、学校から500m位先にあった小学校が屋根まで津波に飲まれていました。自分たちが立っているところまでは来ないだろうと高をくくっていたら、100m位先の4階建ての公民館の3階まで届きそうな勢いで津波が迫ってきました。慌てて学校脇の小さな水路沿いの道路を走って逃げましたが、途中で逆流してききた津波に追い越されました。幸い道路まで超えてくることはなかったので、何とかみんなが避難しているところまで逃げ切ることができました。一步間違えればどうなっていたかわかりません。

それから少し待ち、暗くなってしまう前に様子を確認しに学校に戻りました。学校は浸水していませんでしたが、遺体安置所にするということで消防団の方が体育館を片付けていました。机や椅子、落ちてきた鉄骨を取り払うとともに、遺体安置所にはふさわしくないと紅白幕もすべて取り外されていました。片付けが終わると、消防団のみなさんはまた捜索に戻りました。しばらくその場で待っていると、数名の老人が避難してきました。学校脇の老人施設が完全に津波に飲まれ、大きな被害が出た中でかろうじて助かった数名です。一人は頭から激しい出血をしており、私は素手で止血をしました。学校から毛布、タオル類は避難している生徒に届けてしまっており、手袋もなかったので素手で止血するしかありませんでした。その方は苦しさのあまり、「おっ母、助けでけろ」、「死にでえあ、殺せ」と繰り返していました。私は「大丈夫だでば」、「助かっから」と励ますしかできなく無力感を感じました。幸い、近くの診療所から避難してきた医師と看護師に処置していただき、この方は助かりました。それからしばらくすると、この体育館も危ないということで遺体安置所を別に場所に設置することになりました。

夢中で避難や学校で様々な対応をしていた間は考えず済んでいましたが、落ち着いてくと自分の家族と家が心配になってきました。実は、津波が来た直後は、我が家と隣にある実家は完全に津波に飲まれたなと思っていました。妻と中学生1人、小学生2人、我が家の隣には祖父母がいますが、家にいたとしたらかなりの確率で駄目だろうなと覚悟もしていました。

その後、周囲の状況わかるにつれ、少しの生徒を残してほとんどの生徒が帰宅することができたので、校長先生から帰宅できる職員は帰宅するよう指示が出ました。大船渡市内の津波が来ていないところまでは車が通れると聞いた私と先ほどの先輩は、残る先生方に申し訳ないと思いながらも帰宅させていただきました。車は大船渡高校から少し先までしか通ることができませんでした。私たちは、抜け道があることを思い出し、減多に通ることのない山道を進みました。山を抜けることはできましたが、平地に出るとやはり道路は通ることができませんでした。ここからは、歩くしかないとまた山道（途中から道もなく

なりますが)に入りました。しかし、夜の12時を過ぎており小さなペンライトしか明かりがなく、防寒着も来ていないので途中で断念して引き返しました。それから近くの公民館で休ませてもらうことにしました。

明るくなり始めたあたりに再出発しました。津波が来た時間を考えると妻は職場にいるのではないかと思い直し、引き返しました。勘が当たり、妻の職場に着くと炊き出しをしていた妻に会うことができました。それからすぐに妻と二人で山を越え自宅に向かいました。我が家にたどり着くと、流されてはいなかったけれども1階が全滅でした。庭には近所の家や車が流されてきていました。家族は、祖父母と家にいた小学生6年の息子が近くの高い位置にある親戚の家に無事避難していました。しかし、中学生1年、もう1人の小学生4年の息子はいませんでした。少し経つと、学校にいた中学生と小学生はそれぞれまとまって避難していると情報がありました。そこで、近所の親たちとすぐに安否確認に向かいました。幸い全員が無事避難していました。避難所も開設されておらず食料の心配もありましたが、すぐに連れて帰りました。理由は、私の家のすぐ近くに地下水の水場があり、枯れたことがないからです。この時も枯れていなかったのも、水の心配はしなくてもよいと確信があったからです。

その後は、3軒の家で93名が避難生活を始めました。親戚、他人関係なしです。私の地域では公民館、中学校、小学校が浸水したので大人数が長期避難できる場所を作ることができませんでした。私は、1階は津波で泥だらけでしたが2階が無事だったので2～3日で自宅に戻りましたが、多くの人は3軒の家に残りました。しばらくして、我が家の前にテント村ができたので、残った人の大半はテント村に移動し3軒の家での避難生活は解散しました。それから約半年後、私を含め家を失った人が仮設住宅に入居しました。

仮設住宅に入居するまでの間、避難した私たちは同じ釜の飯を食べました。避難所になった3軒の家の外に炊事場を作り、ここにいない近所の人の分も含め100人以上の食事を交代で作りました。材料は、初めのうちは各家にかろうじて残った食材を持ち寄りました。火は焚火です。毎朝5時くらいに火をつけ、朝食が終わったら男たちは山に焚き木拾いに行きました。太いものは斧で割りました。日中は、トイレが足りないから畑に穴を掘ろうとか、見ると恥ずかしいから囲いをかけよう、年寄りにはしゃがむのが大変だから便座をつくらう、炊事場が雨ざらしだから屋根をかけようとかみんなで知恵を出し合

い、サバイバルに近いような生活をしました。夕食は夕方5時です。食べたらずいぶん火事を出さないように消えるまでで火を囲み、星を見たりしながら語り合い、7時くらいには眠りにつきました。そのうち物資が届くようになり、火も焚火から薪ストーブになりましたが、生活リズムは変わりませんでした。なぜか、風邪もひかず、もめごともしず、体力があつて不思議な感じでした。

以上が、東日本大震災から約半年の私の周囲の状況の一部です。被害の程度やその後の避難生活、復興の様子は場所によって、人によって違います。また、感情も同様です。時を経た今思うことは、とにかく生きることの大切さです。もちろん生きていくためには苦勞があります。悩みや迷いもあります。しかし、生きていくからこそ味わえる喜びや幸せがあるのです。私は生きています。ぜひ、皆さんも生きてほしいと思います。そして、平時でも有事でもとにかく「生きる、逆に言えば死なない」ために必要なことを学び、身に付けてほしいと思います。



## 令和6年度『ハソウ・タペストリー贈呈式』生徒感想集

### 【1年】

- 今日のハソウ・タペストリー贈呈式で改めて校長先生の話や込められた願いなどを聞いて、自分は震災を経験はしていないけど、生きることの大切さや当時の大変さなどを考え直すことができ良かったです。ぜひこれからも伝わってほしいと思いました。(女)
- ハソウ・タペストリー贈呈式校長先生の話聞いて、ハソウが長く受け継がれているということ、タペストリーでは「生きる」がタイトルになっていて、東日本大震災をきっかけに「生きる」にしたことが分かりました。(男)
- 今日のハソウ・タペストリー贈呈式でハソウ・タペストリーを贈呈していただきありがとうございました。校長先生の震災時の体験を読んで、困ったときは助け合うということが大切だということが分かりました。これからも校長先生の話をお忘れず、そしてハソウを受け継いでいきます。(男)
- 校長先生の震災を読んで、自分たちが生まれていない頃はこんな震災があつて怖く感じました。タペストリーのように「生きる」という気持ちを持って、自分自身を大切にしていきたいです。(女)
- こめられた思い「生きる」を思い出して、何か嫌なことや相談したいことがあったら、相談することを心がけていきたいです。(男)
- 今日のハソウ・タペストリー贈呈式で、ハソウ・タペストリーに意味が込められていて内容がすごくいいなと思います。(男)
- 震災のことを聞いて、津波によってどのような災害を受けたのかが分かりました。震災のことが込められているタペストリーの「生きる」の意味が分かりました。(男)
- 今回のハソウ・タペストリー贈呈式では、校長先生がタペストリーに込めた震災や震災の後の思いを「生きる」としてその時はとても辛かったけど、今生きているから、生き抜こうという強い気持ちが分かる贈呈式でした。「生きる」も含め、歴代の校長先生方が込めた思いを胸に頑張っていこうと思いました。(男)
- 贈呈式で「生きる」に込めた思いがしっかり伝わったのでよかったです。校長先生の話を読んで、人との協力はとても大切なことだと思いました。(男)
- ハソウ・タペストリー贈呈式で、ハソウに込められた思いを知らなかったけど知ることができてよかったですし、校長先生の話を読んで、震災が起きた時の周りの様子を知ることができたので、この震災を忘れないようにしたいです。(女)

### 【2年】

- 今回の贈呈式ではハソウをいただき、7年前から唐丹にハソウを送っていただいていることを知りました。また、これからの生活で「生きる」ことを大切にしたいと思います。(男)
- ハソウがどのような経緯で唐丹中学校に寄贈されるようになったか、どのような思いが込められているか知ることができました。タペストリーの「生きる」には東日本大震災を経験し、生きることの大切さを伝えたいという意味が込められていることを知ったので、辛いことがあつて



も生きることは大切だと思いました。(女)

○今日のハソウ・タペストリー贈呈式では、タペストリーに込められた思いについてや、どのような経緯でハソウやタペストリーが唐丹中に贈られてくるようになったのかを知ることができてよかったです。(女)

○今日のハソウ・タペストリー贈呈式では、唐丹中では7年前からハソウをいただいていたたり、タペストリーでは校長先生の話聞いて「生きる」の意味が分かりました。(男)

○今日の贈呈式では、ハソウの底の「生きる」の意味が分かりました。7年前から続いている行事だということを知りました。(女)

### 【3年】



○きれいなタペストリーやハソウなどを贈っていただいて、これからも大事にしたいと思いました。ハソウもまた吹く機会があったら吹きたいと思いました。(女)

○震災から10年以上も経っているのに、ハソウなどを贈呈していただくことに感謝している。歴代の校長先生がタペストリーに書いたように、「感謝」、「つなぐ」、「生きる」を大切に生活していきたい。(女)

○タペストリーを見て、校長先生の考えた「生きる」という意味の深さについて考えさせられた。とても高価なものを贈っていただきありがとうございました。(男)

○タペストリーがすごくきれいだなと思いました。キーワードも「感謝」、「つなぐ」ときて、今回は「生きる」。自分的にはストーリー性みたいなものを感じられていいなと思いました。(男)

○タペストリーを見て「生きる」という字が強調されるようなものだと思います。「生きる」を大切にこれからもがんばりたいです。(男)

○今まで何度もハソウやタペストリーをいただいているのを知れたし、タペストリーに込められた言葉の意味を知れてよかったです。今回は「生きる」という文字でその言葉も良いと思いました。そして感謝をしっかりとりたいと思いました。(男)

○ハソウやタペストリーは、遠くから作っていることを知って、そんなに多く作れなかったり、貴重だということを改めて知りました。いつも支えをくれてありがとうございます。(男)

○ハソウはすごく形がきれいで、タペストリーは色合いがとても素敵だと思いました。唐丹中学校に贈られてきた意味、「生きる」という言葉には様々な意味があると思うので、考えて過ごしていきたいと思いました。(女)

○タペストリーに書いてある「生きる」の意味を理解することができました。校長先生が言っていたように生きていきたいです。ハソウとタペストリーを大切に扱いたいです。(女)

○小中学校の校長先生が描いた「感謝」、「つなぐ」、「生きる」という言葉を大切にしたいと思った。タペストリーは緑が主で、とてもきれいだと思った。(男)

## — 募金のお願い : 2030年3月まで —

能登半島地震から1年。唐丹希望基金は2030年3月まで「共に生きる」姿勢を、能登に届け続けます。皆様の温かい募金をお願いします。

- ・12月17日、大谷小中学校に唐丹小学校を通じて80,000円を送金を済ませました。
- ・輪島中学校は学校長と話し合った結果、3月中旬前後に送金することにしました。  
できるだけ、多くの募金を届けたい事を話し、このように承諾して頂きました。

### ◆募金方法（振込口座）

- 1,募金期間 2024年1月～2030年3月（「唐丹希望基金」:2030年3月まで活動）
- 2,支 援 先 唐丹小中学校・繰越金を輪島市立輪島中学校と珠洲市立大谷小中学校に送ります。
- 3,振込口座 「支援金振込先 タカダテエコ」  
ゆうちょ銀行 記号：18390 番号：13087781

### 希望は連帯を生み、連帯は平和を生み出す源である」

—「唐丹希望基金・唐丹小中学校・唐丹町」の連帯と一致 —



2011/3/11から14年

このままの姿で、しばらく、歩みます！ いつの日か、子供たちに受け継がれる事を願い・・・。

唐丹希望基金は「共存・共生の社会」の創造の尊さを知っています。そして「信頼・友情・絆」に満ち溢れている。

皆様と共に、2030年3月まで。

### 「忘れてはいけない 忘れられない あの日のことを」

東日本大震災犠牲者に捧げる「鎮魂の歌」

楽譜:「鎮魂の歌」 歌詞カード 千葉隆男作詞 太田代政男作曲 柴田公平編曲

[https://www.youtube.com/watch?v=XAN\\_P97ieag&feature=youtu.be](https://www.youtube.com/watch?v=XAN_P97ieag&feature=youtu.be)



[E E C 唐丹希望基金 \(eec-2020.com\)](http://eec-2020.com) / [唐丹希望基金高館千枝子 - 検索 \(bing.com\)](http://www.bing.com)